



第 10 号

2018年
12月25日発行

私の学生時代

蒲原 義明

私が国文学科に入学したのは、今を去ること四十四年前の昭和49年であった。当時のカリキュラムではゼミナールがなく、代わりに各種研究会があり、かなりの学生が所属していた。研究会では、毎週行われる勉強会や、学生が調査した成果発表の場である合宿のほか、研究会対抗のソフトボール大会などのレクリエーションなどが行われ、私の学生生活のなかで大きな位置を占めていたように思う。私は有吉保先生が主催されていた和歌文学研究会に所属し、当時大学院生であった齋藤彰先生、辻勝美先生、田村柳堂先生などから国文学科の学生として必須の基本図書や文献の調査方法をはじめ古典資料の読解など、古典研究のいろはを教わった。

和歌文学研究会では妙高高原にある「記念館山荘」で夏合宿を行うのが常であった。研究室や個人の本を手分けして鞆やリュックに詰め込み、深夜に出発する急行「妙高」に全員が乗車できるように、夕方から上野駅ホームに列ぶという強行軍であった。合宿は一週間近い長丁場で、参加された二松学舎大学の半田公平先生、農獣医学部（現生物資源科学部）の青木賢豪先生、宮内庁書陵部の小池一行先生、当時、

国文学研究資料館に勤務されていた杉山重行先生など、研究会出身の先生方の前で緊張しながら発表を行ったことを今でも鮮烈に記憶している。学生の発表が終わると有吉先生や上記の先生をはじめ、大学院生や高校の教員となった先生方を含めた研究会出身のメンバーが千載集の発表や原稿の読み合わせを行っており、学生とは全くレベルの異なる研究活動に大いに刺激を受けた。これは、昭和51年に刊行された『千載和歌集の基礎的研究』に向けての活動であったが、研究書が上梓されるまでの一過程を見聞できた、得がたい経験であった。

普段の研究活動では、時折有吉先生のお宅で様々な古典籍を見せていただいた。そこでは本の解説だけではなく本にまつわるいくつもの箴言をいただいた。今でも覚えているものを二つばかり紹介しよう。『学生ではなかなか買うことのできない専門書も研究室や図書館に行けば簡単に閲覧できる。せっかく学費を払っているのだからそれらを使うべく利用せよ。しかし本当に勉強をしていれば、いつの間にか自分の本棚には一定数の本が並んでいるはずだ。』『百円の古本といえども、本を買うという行為には必ず経済的な痛みが伴うものだ。覚悟がなくては本は手に入らない。次に買う、余裕がきたら買おうと思っただけでは一生本は買えないものだ。』

このような影響からか、学生時代はよく本を買った。時間を見つけては神保町を中心とした古書店を巡り、絶版になった研究書や雑誌、後には版本や写本などを購入した。その際に手に入れた雑誌に掲載されていた橋本不美男先生の論文に触発され、勅撰集における心製百首の研究というテーマを得ることができた。学生時代の刺激ある良い環境と様々な本との出会いが私を育ててくれたと感謝している。

[生物資源科学部教授]

OB・OGだより

私を支える経験

大塚 香

学部から大学院に進学し、修了後、私立高校の教員となり、さらに都立高校に移りました。遠回りしているようですが、様々な学校を経験できて良かったと思います。

周知の通り、都立高校では異動がありま
す。高校一八六校、中等教育学校五校が異
動の対象です。学校が違えば、当然生徒の
様子も違います。異動の際に必要なものは、自分の経験をその学校や生徒に合わせ
て活用していく力でしょうか。まだまだ未
熟ですが、なんとかやっています。

現在は、八王子東高校という進学指導重
点校に勤務しています。進学指導重点校に
は日比谷・戸山・西・八王子東・青山・国立・
立川の七校が指定されています。進学実績
に関して数値目標もあり、それまで経験し
た学校とは様子がかなり違うので、着任し
た当初はとまどうことばかりでした。違う
といえ、八王子東では教務主幹となり、

仕事の内容も大きく変わりました。今は授
業や生徒指導だけでなく、学校経営や組織
運営にも取り組んでいます。教務の実務の
他に、管理職補佐として学校改革に向けた
教育活動への提言も行っています。

自分の経歴を振り返って実感したのは、
「無駄な経験は一つもない」ことです。私は
よく失敗をします。落ち込むこともしばし
ば。しかし、失敗したから学べたこともあ
りました。人の温かさに触れたのも、上手
くいかなかった時でした。良い経験も残念
な経験も、自分を支えるものとして今後も
大切にしていきたいと思っています。

[平成6年国文学科卒業]

国文学と医療の意外な接点

矢部 公子

医療に携わる仕事柄、患者さんやご家族
に寄り添い、精神的に支えることは、私の
大切な業務の一つです。患者さんは、診察
や問診時に、言いにくいことやネガティブ
な気持ちを隠して発信することがあるため、
必要な情報が欠けていることがよくありま
す。そういった場合、情報を補ったり、患

者さんの言葉の裏に潜む真意を忖度するこ
とが必要となります。

つかみどころのない患者心理を読み取り、
理解するのは難しいことです。まるで展開
するストーリーの中から、登場人物達の深
層心理を発掘していく作業のようだと、ふ
と気がつきました。私が出合った古典作品
の多くもそうした作業が必要でした。とく
に、秘めた思いや、妬み、恨み、怠惰、欲
などの認めたくない負の感情など、そのほ
とんどが文中では明確に表現されていな
かったのです。

作品の核心に迫るためには、登場人物の
台詞や行動から想像力を膨らませ、様々な
視点から分析し、理論展開させなければな
りません。この作業は一見簡単なように思
えますが、訓練を重ねないとなかなか習得
できないものです。それが医療現場でも生
かせる技術として身につけられたことは、
とても得がたい成果だったと思っています。

文学作品からは、人間の普遍性も教えら
れました。人の心のありようを学ぶにあた
り、文学作品が優れた教材の一つになる、
という思いがけない発見も、勉強する上で
大きなモチベーションとなりました。

[平成30年文学専攻(国文学)卒業]

交 差 点

梶川ゼミ同窓会記

鈴木 雅裕

平成30年7月28日(土)、梶川信行先生が65歳になることをお祝いして、梶川ゼミの同窓会を学内食堂秋桜で行いました。



梶川先生と卒業生たち

台風12号の影響で、開催が危ぶまれたものの、何事もなく、およそ四〇名の卒業生が集いました。

ゼミの同窓会は今回で二度目です。前回は、先生が還暦を迎えた時でしたので、およそ五年ぶりの開催となりました。久しぶりに会った先生との談笑もさることながら、学生生活を共にしたゼミ生同士、その時々思い出を交えて、近況報告を話題に、大いに盛り上がりました。

2次会は居酒屋たつみの本店です。飲み会では常々お世話になってきた思い出の場所です。メニューも変わらず、あの頃のままだより打ち解けた雰囲気の中、世代を超えて交流を深めることができました。

以上、盛況のうちに同窓会が終了したことを、ここに報告する次第です。

さて、卒業して数年も過ぎると、当時の友人と会う機会も減ってくるものです。そんな中、ともに過ごした大学で、恩師を囲みつつ語りあう時間は感慨深いものがありました。

また、写真の通り、そこには世代を超えた新たな出会いもありました。そうしたことが、明日への活力にもなるものだ、と、五年ぶりの会を通じて実感しました。毎年と

はいかないまでも、数年に一度くらい、卒業生が集まる機会を設けてもよいのではないのでしょうか。

文理学部では桜麗祭期間中に、ホームカミングデーという卒業生たちが集う行事があります。国文学科の先生方も参加しています。卒業生の皆さんもこうした催しをきっかけに、同窓会を企画してみてはいかがでしょうか。

(国文学科助手)



未来の国文学科生？

談話室

ヨシナシゴト

久保木 秀夫

本年度、中世文学担当の教員として着任しました。いちおう本学科の出身で、一九九〇年度に入學、そのあと大学院にも進んで、一九九七年度まで在籍していました。専門は、中古中世文学の写本や版本、古筆^{こひ}切といった原本資料の調査研究です。一九九八年度以降、国文学研究資料館で十一年、鶴見大学文学部ドキュメンテーション学科（書誌学コース担当）で八年勤め、約二十年ぶりに、文学部にまた通うようになりました。

下高井戸駅〜キャンパス間を歩いたり、キャンパス内を移動したりするたびに、大体どこも平らだな、上り下りしないですむな、みたいなことを、何だかずつと意識しながら過ごしています。前任校は、急な斜面を切り拓いて建てたキャンパスでしたので、一日中、ひたすら上下移動を繰り返していました。その感覚が、まだ抜け切って

いないようです。文学部の三号館にあるエスカレーターも物珍しく、毎回新鮮な気持ちで乗っています。

前任校の所属学科の学生数は、全学年で二五〇人ほどでした。そのくらいの小規模大学で過ごしてきたので、文理ひいては日本大学の、あらゆる面での巨大さ、数の多さに驚きっぱなしです。研究室前の廊下ですら、前任校のその二倍くらいの広さです。大規模・小規模、それぞれの特徴や良さ、難しさなどを実感している毎日です。

多いと言えば、学食数も席数もそうですね。教員も紛れやすい(?)ような気がして、利用しやすくなりました。学食としてまさにあるべきラウメンであるな、カレーであるな、などとはつまらないことを考えながら、美味しくいただいています。学生さんオススメの唐揚げ定食も絶品でした。

学食だけでなく、文学部のこの施設はいいなと痛感したのが、資料館です。学内博物館的施設の設置は、前任校の複数教員間での（叶わぬ）悲願でした。着任早々、五月上旬からの源氏物語展の準備に追われましたが、時間が足りないキビシイ無理だ、などと内心ではなくボヤキつつ、とてもしがないのある仕事だと思うことしきりでした。

展示準備に際しては、助手の高橋優美穂さん、研究員の荒川真一さんの助力を得ました。こちらから何か言い出すまでもなく、その場に着的いたらすぐ、タツタカタカタカと調査カードを採り始める姿を目の当たりにして、何と頼もしい、と感じ入りました。ちよつとこれは、自分もいろいろ頑張らないといけない、と思わされました。

ちなみに古典籍に関心を抱く、専門の研究者からすれば、何と言っても日本大学は、貴重書の宝庫というイメージです。ただ本年度着任してみても、本部管轄の貴重書以外に、文学部にもこんなに豊富な原本資料があったのかと、一研究者として狂喜乱舞しています。と同時に、これほど多彩な原本資料がある上は、ぜひ一人でも多くの学生さんに興味を持ってもらい、活用してもらえれば、などと考えたりもしています。

そう言えば学生としての在籍時、本学科の研究室は、今の二号館——当時は研究棟と呼んでいました——の八階にありました。本年度前期のある日、ふと気が向いて、その八階にまで行ってみました。窓から見える光景は、かつて見ていたそれと同じで、また一方で、違っていました。

[国文学科教員]



明日に向かって計れ!

林 直樹

読

書

案

内

何かを数えたり、計るということは誰にとってもとても身近な行為であろう。本稿ではその何かを「計る」ことにかんする本や事例を紹介したい。

最初に日本語関係から紹介すると、文化庁「国語に関する世論調査」が挙げられる。平成7年から毎年調査が行われているもので、「国語への関心」やいわゆる「ら抜きことば」の使用意識といった日本語にまつわる様々な事象が計られている。現在はインターネットでも結果の一部を閲覧することができる。

より専門的なものでは、計量言語研究の集大成ともいえる計量国語学会編『計量国語学事典』(二〇〇九、朝倉書店)・『データで学ぶ日本語学入門』(二〇一七、朝倉書店)がある。これらを読むと、音声・語彙・文法・文体・方言などなど、日本語のこんなことまで計れるのか、また計ろうとしたのか、と先人たちの創意工夫に驚かされる。図表も豊富で、見ているだけでうっとりとしてくる。

もちろん文学作品を対象にした研究もある。『源氏物語』をはじめとする古典や近現代の作品、さらにシェイクスピアの諸作の文体が、様々な指標により計られている。文体の特徴を計量的に把握するだけでなく、真作・贋作の鑑定を行おうとしているものも多い。また、少し話がずれるが、日本における「統計」という語の定着には森鷗外が関わっていることが宮川公男『統計学の日本史』(二〇一七、東京大学出版会)で詳述されている。

その他、より広く日本文化や日本人の性質を計ろうと迫ったものに、統計数理研究所が継続的に行っている「日本人の国民性調査」があり、こちらもインターネットで調査結果が確認できる。昭和28年から現在まで5年ごとに行われている驚愕の長寿調査によって、日本人の社会問題や男女差に対しての意識が計られ、その変遷が浮き彫りにされている。

さらには、美や考古資料までも計量的に分析した事例が記載されている村上征勝編『文化を計る―文化計量学序説』(二〇〇二、朝倉書店)や、近年ではGoogle ngramを使って文化事象の計量的把握を試みたエレッツ・エイデン、ジャン・II パティースト・ミシエル(阪本芳久訳)『カルチャロミクス 文化をビッグデータで計測する』(二〇一六、草思社)などがあり、これらを読めば身の回りの文化事象を何でも計れるような気になってくる、あるいは計りたくなる衝動に駆られるだろう。

ただし、何かをやみくもに数えたり計れば良いというわけでもない。そのことを知るには、完膚なきまでに「ゴミ調査」を批判する谷岡一郎『社会調査のウソ』(二〇〇〇、文藝春秋)が参考になる。ここまでは来れば、何かを計るだけでなく「何を計ろうとしているか」を各種調査から透視できるようにになっているに違いなく、日常生活を一変させてくれること請け合いです。

〔経済学部教員〕



藤平ゼミ

(藤平 泉先生担当)

水曜5限



—ゼミ授業風景—

私達が学ぶ藤平先生のゼミでは、和歌を研究しています。和歌といっても、すべての和歌を対象にしているわけではありません。とりわけ『新古今和歌集』の和歌を取りあげ、歌人や歌風などについて様々な観点から考察し、自分の考えをまとめていき

ます。

現在、所属人数は二〇名弱です。男女の比率は約三対七で、女子の比率が高くなっています。ゼミをどこにしようか、決めかねている男子学生の皆さんには、花に囲まれるイチ押しゼミかもしれません。

冗談はさておき、冒頭で和歌を研究するゼミと記しましたが、一般的に和歌は難しそうな印象を持つ方も多いと思います。しかし、和歌の一番の魅力は、今なお色褪せることのない歌人達の表現力の素晴らしさにあると感じます。この面白さがわかったとき、和歌に対する認識が一変すると思っています。

考えてもみてください。基本的に五七五七七の三十一文字の中で、自分が見たもの、感じたことを読み手に想像させ、深みを感じさせることができるでしょうか。なかなか難しいことかと思えます。

歌人達が自分の表現力を存分に発揮した和歌に触れることによって、美しい言葉や美しい表現を学ぶことができます。皆さんも、あらためて日本語の美しさ、和歌の美しさに触れてみてはいかがでしょう。

以上、和歌を研究している点を中心に述べてきましたが、藤平ゼミは学生間の関わり

りも大切に行っています。昨年の前期は、三年生歓迎会をはじめ、夏休みを利用してバーベキューを実施しました。今年度は、残念ながら台風の影響により、バーベキューは中止となりました。しかし、後期には飲み会なども開催し、大いに交流を深めてきました。大人しいゼミと思われるがちですが、意外と活動的なゼミです。そしてゼミといえば、ゼミ合宿の有無や詳細が気になることかと思えます。藤平ゼミは、夏休みか冬休みの期間に行う予定です。

和歌の美しい表現を学びながら、学生間の交流を深める藤平ゼミに興味を持った方は、是非仲間に加わってください。



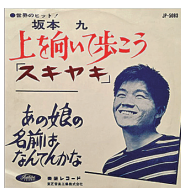
—ゼミコンパー—

〔4年中 臺賢矢〕

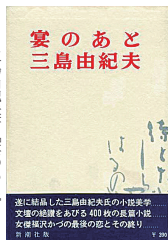
国文学科ヒストリー⑩

1961年(昭和36年)

- 1月20日 米大統領にジョン・F・ケネディが就任
 2月1日 右翼少年が中央論社社長宅を襲撃
 3月15日 『宴のあと』プライバシー侵害で日本初訴訟
 3月28日 三重県名張市で毒ぶどう酒事件が発生
 3月31日 堤博彦氏助手退職
 4月1日 抛出国民年金が正式に発足
 4月1日 大学院文学研究科国文学専攻に博士課程新設
 4月5日 『語文』第10輯刊行
 4月12日 ソ連ガガーリンが人類初有人宇宙飛行に成功
 5月20日 『語文』第十一輯刊行
 6月12日 農業基本法が公布施行
 6月19日 トヨタ自動車が大衆車「パブリカ」を発売
 6月25日 日本大学国文学会総会
 8月13日 東ドイツが「ベルリンの壁」を建設開始
 9月16日 第2室戸台風が上陸し、甚大な被害
 10月2日 柏戸と大鵬が横綱昇進、柏鵬時代の幕明け
 10月15日 「上を向いて歩こう」がリリース
 11月1日 国立国会図書館が開館
 11月1日 渋谷静夫氏助手就任
 11月25日 学術研究発表会開催
 12月12日 クーデター未遂「三無事件」が発覚



「上を向いて歩こう」
ジャケット



三島由紀夫著『宴のあと』

遂に結晶した三島由紀夫氏の小説家としての文壇の地位をあげる400枚の豪華小説
女優風花かづの最後の恋とその後

と題する講演が行われた。
 心に稀観書展示会が開かれた。

【学内外の動き】4月、大学院の博士課程(国文学専攻)が設置され、現組織の原型が完成した。6月、日本大学国文学会総会が開催され、①大伴坂上郎女・渡辺紘子、②万葉集巻十三の編纂試論・地名の問題①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿㏀㏁㏂㏃㏄㏅㏆㏇㏈㏉㏊㏋㏌㏍㏎㏏㏐㏑㏒㏓㏔㏕㏖㏗㏘㏙㏚㏛㏜㏝㏞㏟㏠㏡㏢㏣㏤㏦㏧㏨㏩㏪㏫㏬㏭㏮㏯㏰㏱㏲㏳㏴㏵㏶㏷㏸㏹㏺㏻㏼㏽㏾㏿㐀㐁㐂㐃㐄㐅㐆㐇㐈㐉㐊㐋㐌㐍㐎㐏㐐㐑㐒㐓㐔㐕㐖㐗㐘㐙㐚㐛㐜㐝㐞㐟㐠㐡㐢㐣㐤㐥㐦㐧㐨㐩㐪㐫㐬㐭㐮㐯㐰㐱㐲㐳㐴㐵㐶㐷㐸㐹㐺㐻㐼㐽㐾㐿㑀㑁㑂㑃㑄㑅㑆㑇㑈㑉㑊㑋㑌㑍㑎㑏㑐㑑㑒㑓㑔㑕㑖㑗㑘㑙㑚㑛㑜㑝㑞㑟㑠㑡㑢㑣㑤㑥㑦㑧㑨㑩㑪㑫㑬㑭㑮㑯㑰㑱㑲㑳㑴㑵㑶㑷㑸㑹㑺㑻㑼㑽㑾㑿㒀㒁㒂㒃㒄㒅㒆㒇㒈㒉㒊㒋㒌㒍㒎㒏㒐㒑㒒㒓㒔㒕㒖㒗㒘㒙㒚㒛㒜㒝㒞㒟㒠㒡㒢㒣㒤㒥㒦㒧㒨㒩㒪㒫㒬㒭㒮㒯㒰㒱㒲㒳㒴㒵㒶㒷㒸㒹㒺㒻㒼㒽㒾㒿㓀㓁㓂㓃㓄㓅㓆㓇㓈㓉㓊㓋㓌㓍㓎㓏㓐㓑㓒㓓㓔㓕㓖㓗㓘㓙㓚㓛㓜㓝㓞㓟㓠㓡㓢㓣㓤㓥㓦㓧㓨㓩㓪㓫㓬㓭㓮㓯㓰㓱㓲㓳㓴㓵㓶㓷㓸㓹㓺㓻㓼㓽㓾㓿㔀㔁㔂㔃㔄㔅㔆㔇㔈㔉㔊㔋㔌㔍㔎㔏㔐㔑㔒㔓㔔㔕㔖㔗㔘㔙㔚㔛㔜㔝㔞㔟㔠㔡㔢㔣㔤㔥㔦㔧㔨㔩㔪㔫㔬㔭㔮㔯㔰㔱㔲㔳㔴㔵㔶㔷㔸㔹㔺㔻㔼㔽㔾㔿㕀㕁㕂㕃㕄㕅㕆㕇㕈㕉㕊㕋㕌㕍㕎㕏㕐㕑㕒㕓㕔㕕㕖㕗㕘㕙㕚㕛㕜㕝㕞㕟㕠㕡㕢㕣㕤㕥㕦㕧㕨㕩㕪㕫㕬㕭㕮㕯㕰㕱㕲㕳㕴㕵㕶㕷㕸㕹㕺㕻㕼㕽㕾㕿㖀㖁㖂㖃㖄㖅㖆㖇㖈㖉㖊㖋㖌㖍㖎㖏㖐㖑㖒㖓㖔㖕㖖㖗㖘㖙㖚㖛㖜㖝㖞㖟㖠㖡㖢㖣㖤㖥㖦㖧㖨㖩㖪㖫㖬㖭㖮㖯㖰㖱㖲㖳㖴㖵㖶㖷㖸㖹㖺㖻㖼㖽㖾㖿㗀㗁㗂㗃㗄㗅㗆㗇㗈㗉㗊㗋㗌㗍㗎㗏㗐㗑㗒㗓㗔㗕㗖㗗㗘㗙㗚㗛㗜㗝㗞㗟㗠㗡㗢㗣㗤㗥㗦㗧㗨㗩㗪㗫㗬㗭㗮㗯㗰㗱㗲㗳㗴㗵㗶㗷㗸㗹㗺㗻㗼㗽㗾㗿㘀㘁㘂㘃㘄㘅㘆㘇㘈㘉㘊㘋㘌㘍㘎㘏㘐㘑㘒㘓㘔㘕㘖㘗㘘㘙㘚㘛㘜㘝㘞㘟㘠㘡㘢㘣㘤㘥㘦㘧㘨㘩㘪㘫㘬㘭㘮㘯㘰㘱㘲㘳㘴㘵㘶㘷㘸㘹㘺㘻㘼㘽㘾㘿㙀㙁㙂㙃㙄㙅㙆㙇㙈㙉㙊㙋㙌㙍㙎㙏㙐㙑㙒㙓㙔㙕㙖㙗㙘㙙㙚㙛㙜㙝㙞㙟㙠㙡㙢㙣㙤㙥㙦㙧㙨㙩㙪㙫㙬㙭㙮㙯㙰㙱㙲㙳㙴㙵㙶㙷㙸㙹㙺㙻㙼㙽㙾㙿㚀㚁㚂㚃㚄㚅㚆㚇㚈㚉㚊㚋㚌㚍㚎㚏㚐㚑㚒㚓㚔㚕㚖㚗㚘㚙㚚㚛㚜㚝㚞㚟㚠㚡㚢㚣㚤㚥㚦㚧㚨㚩㚪㚫㚬㚭㚮㚯㚰㚱㚲㚳㚴㚵㚶㚷㚸㚹㚺㚻㚼㚽㚾㚿㜀㜁㜂㜃㜄㜅㜆㜇㜈㜉㜊㜋㜌㜍㜎㜏㜐㜑㜒㜓㜔㜕㜖㜗㜘㜙㜚㜛㜜㜝㜞㜟㜠㜡㜢㜣㜤㜥㜦㜧㜨㜩㜪㜫㜬㜭㜮㜯㜰㜱㜲㜳㜴㜵㜶㜷㜸㜹㜺㜻㜼㜽㜾㜿㝀㝁㝂㝃㝄㝅㝆㝇㝈㝉㝊㝋㝌㝍㝎㝏㝐㝑㝒㝓㝔㝕㝖㝗㝘㝙㝚㝛㝜㝝㝞㝟㝠㝡㝢㝣㝤㝥㝦㝧㝨㝩㝪㝫㝬㝭㝮㝯㝰㝱㝲㝳㝴㝵㝶㝷㝸㝹㝺㝻㝼㝽㝾㝿㞀㞁㞂㞃㞄㞅㞆㞇㞈㞉㞊㞋㞌㞍㞎㞏㞐㞑㞒㞓㞔㞕㞖㞗㞘㞙㞚㞛㞜㞝㞞㞟㞠㞡㞢㞣㞤㞥㞦㞧㞨㞩㞪㞫㞬㞭㞮㞯㞰㞱㞲㞳㞴㞵㞶㞷㞸㞹㞺㞻㞼㞽㞾㞿㟀㟁㟂㟃㟄㟅㟆㟇㟈㟉㟊㟋㟌㟍㟎㟏㟐㟑㟒㟓㟔㟕㟖㟗㟘㟙㟚㟛㟜㟝㟞㟟㟠㟡㟢㟣㟤㟥㟦㟧㟨㟩㟪㟫㟬㟭㟮㟯㟰㟱㟲㟳㟴㟵㟶㟷㟸㟹㟺㟻㟼㟽㟾㟿㠀㠁㠂㠃㠄㠅㠆㠇㠈㠉㠊㠋㠌㠍㠎㠏㠐㠑㠒㠓㠔㠕㠖㠗㠘㠙㠚㠛㠜㠝㠞㠟㠠㠡㠢㠣㠤㠥㠦㠧㠨㠩㠪㠫㠬㠭㠮㠯㠰㠱㠲㠳㠴㠵㠶㠷㠸㠹㠺㠻㠼㠽㠾㠿㡀㡁㡂㡃㡄㡅㡆㡇㡈㡉㡊㡋㡌㡍㡎㡏㡐㡑㡒㡓㡔㡕㡖㡗㡘㡙㡚㡛㡜㡝㡞㡟㡠㡡㡢㡣㡤㡥㡦㡧㡨㡩㡪㡫㡬㡭㡮㡯㡰㡱㡲㡳㡴㡵㡶㡷㡸㡹㡺㡻㡼㡽㡾㡿㢀㢁㢂㢃㢄㢅㢆㢇㢈㢉㢊㢋㢌㢍㢎㢏㢐㢑㢒㢓㢔㢕㢖㢗㢘㢙㢚㢛㢜㢝㢞㢟㢠㢡㢢㢣㢤㢥㢦㢧㢨㢩㢪㢫㢬㢭㢮㢯㢰㢱㢲㢳㢴㢵㢶㢷㢸㢹㢺㢻㢼㢽㢾㢿㣀㣁㣂㣃㣄㣅㣆㣇㣈㣉㣊㣋㣌㣍㣎㣏㣐㣑㣒㣓㣔㣕㣖㣗㣘㣙㣚㣛㣜㣝㣞㣟㣠㣡㣢㣣㣤㣥㣦㣧㣨㣩㣪㣫㣬㣭㣮㣯㣰㣱㣲㣳㣴㣵㣶㣷㣸㣹㣺㣻㣼㣽㣾㣿㤀㤁㤂㤃㤄㤅㤆㤇㤈㤉㤊㤋㤌㤍㤎㤏㤐㤑㤒㤓㤔㤕㤖㤗㤘㤙㤚㤛㤜㤝㤞㤟㤠㤡㤢㤣㤤㤥㤦㤧㤨㤩㤪㤫㤬㤭㤮㤯㤰㤱㤲㤳㤴㤵㤶㤷㤸㤹㤺㤻㤼㤽㤾㤿㥀㥁㥂㥃㥄㥅㥆㥇㥈㥉㥊㥋㥌㥍㥎㥏㥐㥑㥒㥓㥔㥕㥖㥗㥘㥙㥚㥛㥜㥝㥞㥟㥠㥡㥢㥣㥤㥥㥦㥧㥨㥩㥪㥫㥬㥭㥮㥯㥰㥱㥲㥳㥴㥵㥶㥷㥸㥹㥺㥻㥼㥽㥾㥿㦀㦁㦂㦃㦄㦅㦆㦇㦈㦉㦊㦋㦌㦍㦎㦏㦐㦑㦒㦓㦔㦕㦖㦗㦘㦙㦚㦛㦜㦝㦞㦟㦠㦡㦢㦣㦤㦥㦦㦧㦨㦩㦪㦫㦬㦭㦮㦯㦰㦱㦲㦳㦴㦵㦶㦷㦸㦹㦺㦻㦼㦽㦾㦿㧀㧁㧂㧃㧄㧅㧆㧇㧈㧉㧊㧋㧌㧍㧎㧏㧐㧑㧒㧓㧔㧕㧖㧗㧘㧙㧚㧛㧜㧝㧞㧟㧠㧡㧢㧣㧤㧥㧦㧧㧨㧩㧪㧫㧬㧭㧮㧯㧰㧱㧲㧳㧴㧵㧶㧷㧸㧹㧺㧻㧼㧽㧾㧿㨀㨁㨂㨃㨄㨅㨆㨇㨈㨉㨊㨋㨌㨍㨎㨏㨐㨑㨒㨓㨔㨕㨖㨗㨘㨙㨚㨛㨜㨝㨞㨟㨠㨡㨢㨣㨤㨥㨦㨧㨨㨩㨪㨫㨬㨭㨮㨯㨰㨱㨲㨳㨴㨵㨶㨷㨸㨹㨺㨻㨼㨽㨾㨿㩀㩁㩂㩃㩄㩅㩆㩇㩈㩉㩊㩋㩌㩍㩎㩏㩐㩑㩒㩓㩔㩕㩖㩗㩘㩙㩚㩛㩜㩝㩞㩟㩠㩡㩢㩣㩤㩥㩦㩧㩨㩩㩪㩫㩬㩭㩮㩯㩰㩱㩲㩳㩴㩵㩶㩷㩸㩹㩺㩻㩼㩽㩾㩿㪀㪁㪂㪃㪄㪅㪆㪇㪈㪉㪊㪋㪌㪍㪎㪏㪐㪑㪒㪓㪔㪕㪖㪗㪘㪙㪚㪛㪜㪝㪞㪟㪠㪡㪢㪣㪤㪥㪦㪧㪨㪩㪪㪫㪬㪭㪮㪯㪰㪱㪲㪳㪴㪵㪶㪷㪸㪹㪺㪻㪼㪽㪾㪿㫀㫁㫂㫃㫄㫅㫆㫇㫈㫉㫊㫋㫌㫍㫎㫏㫐㫑㫒㫓㫔㫕㫖㫗㫘㫙㫚㫛㫜㫝㫞㫟㫠㫡㫢㫣㫤㫥㫦㫧㫨㫩㫪㫫㫬㫭㫮㫯㫰㫱㫲㫳㫴㫵㫶㫷㫸㫹㫺㫻㫼㫽㫾㫿㬀㬁㬂㬃㬄㬅㬆㬇㬈㬉㬊㬋㬌㬍㬎㬏㬐㬑㬒㬓㬔㬕㬖㬗㬘㬙㬚㬛㬜㬝㬞㬟㬠㬡㬢㬣㬤㬥㬦㬧㬨㬩㬪㬫㬬㬭㬮㬯㬰㬱㬲㬳㬴㬵㬶㬷㬸㬹㬺㬻㬼㬽㬾㬿㭀㭁㭂㭃㭄㭅㭆㭇㭈㭉㭊㭋㭌㭍㭎㭏㭐㭑㭒㭓㭔㭕㭖㭗㭘㭙㭚㭛㭜㭝㭞㭟㭠㭡㭢㭣㭤㭥㭦㭧㭨㭩㭪㭫㭬㭭㭮㭯㭰㭱㭲㭳㭴㭵㭶㭷㭸㭹㭺㭻㭼㭽㭾㭿㮀㮁㮂㮃㮄㮅㮆㮇㮈㮉㮊㮋㮌㮍㮎㮏㮐㮑㮒㮓㮔㮕㮖㮗㮘㮙㮚㮛㮜㮝㮞㮟㮠㮡㮢㮣㮤㮥㮦㮧㮨㮩㮪㮫㮬㮭㮮㮯㮰㮱㮲㮳㮴㮵㮶㮷㮸㮹㮺㮻㮼㮽㮾㮿㯀㯁㯂㯃㯄㯅㯆㯇㯈㯉㯊㯋㯌㯍㯎㯏㯐㯑㯒㯓㯔㯕㯖㯗㯘㯙㯚㯛㯜㯝㯞㯟㯠㯡㯢㯣㯤㯥㯦㯧㯨㯩㯪㯫㯬㯭㯮㯯㯰㯱㯲㯳㯴㯵㯶㯷㯸㯹㯺㯻㯼㯽㯾㯿㰀㰁㰂㰃㰄㰅㰆㰇㰈㰉㰊㰋㰌㰍㰎㰏㰐㰑㰒㰓㰔㰕㰖㰗㰘㰙㰚㰛㰜㰝㰞㰟㰠㰡㰢㰣㰤㰥㰦㰧㰨㰩㰪㰫㰬㰭㰮㰯㰰㰱㰲㰳㰴㰵㰶㰷㰸㰹㰺㰻㰼㰽㰾㰿㱀㱁㱂㱃㱄㱅㱆㱇㱈㱉㱊㱋㱌㱍㱎㱏㱐㱑㱒㱓㱔㱕㱖㱗㱘㱙㱚㱛㱜㱝㱞㱟㱠㱡㱢㱣㱤㱥㱦㱧㱨㱩㱪㱫㱬㱭㱮㱯㱰㱱㱲㱳㱴㱵㱶㱷㱸㱹㱺㱻㱼㱽㱾㱿㲀㲁㲂㲃㲄㲅㲆㲇㲈㲉㲊㲋㲌㲍㲎㲏㲐㲑㲒㲓㲔㲕㲖㲗㲘㲙㲚㲛㲜㲝㲞㲟㲠㲡㲢㲣㲤㲥㲦㲧㲨㲩㲪㲫㲬㲭㲮㲯㲰㲱㲲㲳㲴㲵㲶㲷㲸㲹㲺㲻㲼㲽㲾㲿㳀㳁㳂㳃㳄㳅㳆㳇㳈㳉㳊㳋㳌㳍㳎㳏㳐㳑㳒㳓㳔㳕㳖㳗㳘㳙㳚㳛㳜㳝㳞㳟㳠㳡㳢㳣㳤㳥㳦㳧㳨㳩㳪㳫㳬㳭㳮㳯㳰㳱㳲㳳㳴㳵㳶㳷㳸㳹㳺㳻㳼㳽㳾㳿㴀㴁㴂㴃㴄㴅㴆㴇㴈㴉㴊㴋㴌㴍㴎㴏㴐㴑㴒㴓㴔㴕㴖㴗㴘㴙㴚㴛㴜㴝㴞㴟㴠㴡㴢㴣㴤㴥㴦㴧㴨㴩㴪㴫㴬㴭㴮㴯㴰㴱㴲㴳㴴㴵㴶㴷㴸㴹㴺㴻㴼㴽㴾㴿㵀㵁㵂㵃㵄㵅㵆㵇㵈㵉㵊㵋㵌㵍㵎㵏㵐㵑㵒㵓㵔㵕㵖㵗㵘㵙㵚㵛㵜㵝㵞㵟㵠㵡㵢㵣㵤㵥㵦㵧㵨㵩㵪㵫㵬㵭㵮㵯㵰㵱㵲㵳㵴㵵㵶㵷㵸㵹㵺㵻㵼㵽㵾㵿㶀㶁㶂㶃㶄㶅㶆㶇㶈㶉㶊㶋㶌㶍㶎㶏㶐㶑㶒㶓㶔㶕㶖㶗㶘㶙㶚㶛㶜㶝㶞㶟㶠㶡㶢㶣㶤㶥㶦㶧㶨㶩㶪㶫㶬㶭㶮㶯㶰㶱㶲㶳㶴㶵㶶㶷㶸㶹㶺㶻㶼㶽㶾㶿㷀㷁㷂㷃㷄㷅㷆㷇㷈㷉㷊㷋㷌㷍㷎㷏㷐㷑㷒㷓㷔㷕㷖㷗㷘㷙㷚㷛㷜㷝㷞㷟㷠㷡㷢㷣㷤㷥㷦㷧㷨㷩㷪㷫㷬㷭㷮㷯㷰㷱㷲㷳㷴㷵㷶㷷㷸㷹㷺㷻㷼㷽㷾㷿㸀㸁㸂㸃㸄㸅㸆㸇㸈㸉㸊㸋㸌㸍㸎㸏㸐㸑㸒㸓㸔㸕㸖㸗㸘㸙㸚㸛㸜㸝㸞㸟㸠㸡㸢㸣㸤㸥㸦㸧㸨㸩㸪㸫㸬㸭㸮㸯㸰㸱㸲㸳㸴㸵㸶㸷㸸㸹㸺㸻㸼㸽㸾㸿㹀㹁㹂㹃㹄㹅㹆㹇㹈㹉㹊㹋㹌㹍㹎㹏㹐㹑㹒㹓㹔㹕㹖㹗㹘㹙㹚㹛㹜㹝㹞㹟㹠㹡㹢㹣㹤㹥㹦㹧㹨㹩㹪㹫㹬㹭㹮㹯㹰㹱㹲㹳㹴㹵㹶㹷㹸㹹㹺㹻㹼㹽㹾㹿㺀㺁㺂㺃㺄㺅㺆㺇㺈㺉㺊㺋㺌㺍㺎㺏㺐㺑㺒㺓㺔㺕㺖㺗㺘㺙㺚㺛㺜㺝㺞㺟㺠㺡㺢㺣㺤㺥㺦㺧㺨㺩㺪㺫㺬㺭㺮㺯㺰㺱㺲㺳㺴㺵㺶㺷㺸㺹㺺㺻㺼㺽㺾㺿㻀㻁㻂㻃㻄㻅㻆㻇㻈㻉㻊㻋㻌㻍㻎㻏㻐㻑㻒㻓㻔㻕㻖㻗㻘㻙㻚㻛㻜㻝㻞㻟㻠㻡㻢㻣㻤㻥㻦㻧㻨㻩㻪㻫㻬㻭㻮㻯㻰㻱㻲㻳㻴㻵㻶㻷㻸㻹㻺㻻㻼㻽㻾㻿㼀㼁㼂㼃㼄㼅㼆㼇㼈㼉㼊㼋㼌㼍㼎㼏㼐㼑㼒㼓㼔㼕㼖㼗㼘㼙㼚㼛㼜㼝㼞㼟㼠㼡㼢㼣㼤㼥㼦㼧㼨㼩㼪㼫㼬㼭㼮㼯㼰㼱㼲㼳㼴㼵㼶㼷㼸㼹㼺㼻㼼㼽㼾㼿㽀㽁㽂㽃㽄㽅㽆㽇㽈㽉㽊㽋㽌㽍㽎㽏㽐㽑㽒㽓㽔㽕㽖㽗㽘㽙㽚㽛㽜㽝㽞㽟㽠㽡㽢㽣㽤㽥㽦㽧㽨㽩㽪㽫㽬㽭㽮㽯㽰㽱㽲㽳㽴㽵㽶㽷㽸㽹㽺㽻㽼㽽㽾㽿㿀㿁㿂㿃㿄㿅㿆㿇㿈㿉㿊㿋㿌㿍㿎㿏㿐㿑㿒㿓㿔㿕㿖㿗㿘㿙㿚㿛㿜㿝㿞㿟㿠㿡㿢㿣㿤㿥㿦㿧㿨㿩㿪㿫㿬㿭㿮㿯㿰㿱㿲㿳㿴㿵㿶㿷㿸㿹㿺㿻㿼㿽㿾㿿

空は暗く、地球は青色

米・アフリカ沿岸など識別
 ガガーリン少佐語る



出迎える人とと抱擁
 人類初の宇宙飛行を伝える『朝日新聞』4月13日付夕刊

人類初の宇宙飛行を伝える『朝日新聞』4月13日付夕刊

【国内外の動き】4月、ソ連が有人宇宙船ボストーク1号の打ちあげに成功。人類初の宇宙飛行を成しとげたガガーリンは「地球は青かった」との名言を残し、一躍時の人となった。米ソ両大国が宇宙開発を競う中、東ドイツが8月に「ベルリンの壁」の建設を開始し、冷戦時代へ突入した。一方、国内では2月に中央論社の社長宅に17歳の右翼少年が押し入り、家政婦と社長夫人を殺傷(風流夢譚事件)。また、3月に三島由紀夫の小説『宴のあと』が日本初のプライバシー侵害訴訟として争われた(『宴のあと』。文学がらみの暗いニュースが続いた中、10月にリリースされた坂本九の「上を向いて歩こう」は全米チャート4週連続1位に輝き、明るい話題を提供した。

研究室訪問 一問一答

- ①趣味は何ですか。
将棋。最近は「見る将」ですが……。
- ②おすすめの本を一冊あげてください。
橘玲『言ってはいけない』(新潮社 2016)。
人生最大のショック。
- ③最近買った高価なものは？
クルマ。「ノア hybrid X」363万円。
- ④おすすめのお店を教えてください。
桜上水の匯香苑。安くておいしい中華。
ほぼ毎週1回通っています。
- ⑤思い出に残る学生時代のアルバイトは？
プログラミング。簡単で高収入でした。



荻野綱男(日本語学専攻)研究室

掲 示 板

国文学科短信

学科ホームページのリニューアルを計画中である。内容の充実をはかるとともに、ユーザーインターフェースの面でも改善をはかる。最近ではパソコンを使わずに、スマートフォンですべてを済ませる人が増えているという。そうした現状にも対応したデザインや使い勝手にも配慮していきたい。

第7回ホームカミングデー

桜麗祭の期間中、11月3日(土)にホームカミングデーが開催された。大学の年中行事としては定着したようだが、卒業生の集まり具合はどうか、気になるところかもしれない。たとえば、交流会がおこなわれた百周年記念館への来場者数は約480名。これを学科数で割れば、1学科あたりとしては、さほど多くないことがわかる。実際は、規模の大きな学科は、参加者数も多い傾向にある。残念ながら国文学科の参加者数は例年10数名にとどまっている。開催情報がきちんと伝

わっているのか、いささか心許ないが、『国文通信』ともども地道に宣伝に努めていくかなさそうである。

文理学部短信

校内の建設工事がひと段落した。写真は工事終了直後の新しい中庭の夕景である。キャンパスの中心部が大きく変わったことを伝えるにはわかりやすい1枚かと思う。次号以降、新たに写真掲載ページを設け、学内の様子をお伝えしていくことにしたい。



同窓会員募集のご案内 (郵便振替口座 00180-3-11183 日本大学国文学会)

国文学会では国文学科の卒業生(大学院・通信教育部を含む)を対象に同窓会員を募集中です。学会行事へ参加していただけるほか、機関誌『国文通信』を年2回お届けします。会費は郵便振替にて1,000円(2年分)から。振込用紙に卒業年次と「同窓会員入会」と明記してご送金くださいれば手続き完了です。国文学科サイトにも詳しい案内記事を掲載しています。

第 10 号
2018年
12月25日発行

日本大学文理学部国文学科
国文通信編集委員会
〒156-8550
東京都世田谷区松上3・25・40

国文通信編集委員会
紅野謙介・鈴木晴彦・竹下義人

国文学科の卒業生(大学院・通信教育部を含む)を対象に同窓会員を募集中です。学会行事へ参加していただけるほか、機関誌『国文通信』を年2回お届けします。会費は郵便振替にて1,000円(2年分)から。振込用紙に卒業年次と「同窓会員入会」と明記してご送金くださいれば手続き完了です。国文学科サイトにも詳しい案内記事を掲載しています。

編集後記

本誌では皆様からの投稿を随時受け付けています。エッセイのほか、同窓会の案内や報告なども歓迎します。詳細は本誌編集委員会宛、お問い合わせください。
電子メールは国文学科サイト内に設置してある「お問い合わせ」フォームから送信できます。感想などもお寄せください。

◆まずは、ご寄稿くださった皆様へ心より御礼を申しあげます。◆本

通信は今号の刊行で第10号となる。はやくも5年を経過した。光陰矢の如しである。◆今号より「交差点」のコーナーを新設。会員の皆様からの自由投稿を掲載するためのスペースである。今回は同窓会報告だが、内容は問わない。ぜひ活用していただきたい。◆掲示板に報じたとおり、今年9月にキャンパス改修工事が完了し、キャンパスは大きな変貌を遂げた。立派に仕上がったキャンパスで学ぶ学生の奮起に期待しつつ、今後の文理学部の発展を願ってやまない。(晴)